〈社会活動報告〉

ネットワーク型調査の試みとしての「3.11慟哭の記録」

金菱清

東北学院大学教養学部地域構想学科

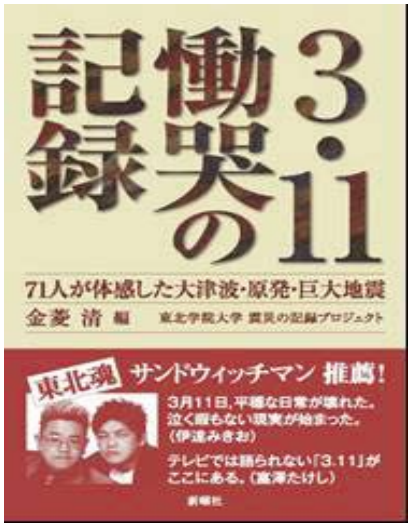

写真１『３.11慟哭の記録』新曜社

１．27市町村・50万字・541頁に及ぶ〝言葉〟

東日本大震災の被災者71人の体験談をまとめた金菱清編　東北学院大学　震災の記録プロジェクト『３・11慟哭の記録―71人が体感した大津波・原発・巨大地震』（新曜社）が，２月下旬に発行された（写真１）。

被災地域27市町村71人の切実な言葉が，541もの膨大なページの中に50万字にもわたってぎっしりと詰め込まれている。写真も一切掲載しないで文字だけの分厚い出版物にしては発売２カ月もたたないうちに異例の３刷の出来（４月末時点）である。

今回本書では，トピック・地域を複数に設け小さな出来事を濃密に描き，できるだけ現場の生々しい「声」に重きを置くという新たなアプローチを提示している。このことによって，実態のつかみにくい1000年規模の大災害を社会史としてまるごと理解しようと試みている。一見すると単なる記録の“寄せ集め”にしか過ぎないようにみえるが，そうではないことを本書を作る過程を振り返りながら，自己言及的に記述してみたいと思う。

２．エスノグラフィーの応用

本書は出来事の“広さ”と“深さ”両方をあわせもつことで，広域大災害の実態／実体をあきらかにしていくエスノグラフィーという手法を用いている。この言葉は通常文化人類学で用いられる学術用語であるが，日本語では「民族誌」と訳され，他の民族のその民族が持つ文化的生活様式を記述する方法である。大災害などの事象は普通私達が経験する事象とは徹底的に異なる意味において，非常時における行動や感情を書き記すことはすぐれてその人にとっての「異文化」（あるいはそれ以上）として理解されるといってもよい。

ただし，通常のエスノグラフィーは一地域のトピックのみを濃密に描き出すことで，現場のリアリティと人間関係や生活を深く理解すための手法である。最近では阪神淡路大震災を質的記述で林春男らが描き出した「災害エスノグラフィー」（2009年NHK出版）が出版され減災の観点から着目を浴びている。

他方，今回用いた方法は，具体的にトピックを拾うと，「震災川柳・震災日誌・仮土葬・遺体身元照合ボランティア・行方不明者捜索・火柱・津波・救命ボート・盗み・車からの脱出・民間ハローワーク・民俗芸能・障害者・介護・ヘリによる脱出・消防団活動・海の信用保証・協業養殖・遺体安置所・自殺未遂・うつ病・福島第一原発の瓦礫撤去・避難区域・失業・母子疎開・避難所運営・一時帰宅・家族同然の牛・スクリーニング・風評被害・脱ニート・液状化現象・山津波・長周期地震動・エコノ

ミー症候群・新幹線閉じ込め・・・」などがある。これらの目次と副題は編集する際にメインにするべきトピックを選んで揃え，1000年規模の災害を把握できるように配置している。いわば調査地を複数地点に拡張したエスノグラフィーの応用的手法である。

原発事故に対する記述も，この複数地点を設けることで，はじめてその人が依って立つスタンスが「異なる」ことがわかる。たとえば反原発運動を展開してきた方は，海の生業からみた世界を説得力をもって濃密に描いている。あるいは原発事故に関わる東電関係者にも今回無理を押して執筆を承諾していただいたが，その人の立場からみた使命感と責任，そして周囲のまなざしの変化に悩み苦しむ家族の胸の内が透けてみえる。

またそれとは別に原発事故の結果として家族や仕事を奪われた生の声を記述することで，散り散りになってしまい声もあげられない人々の実態を記録している。このように多角的に原発事故の影響を描き出すことで，原発に単純に反対か賛成かではなく，それ以前の問題として原発とその影響がどういうものであるかを考えるためのヒントにすることができる。

３．ネットワーク型調査の試み

本書の記述は，調査者である私がインタビューを行い，それを取捨選択しまとめる方法をとっていない。実際にその現場で震災に出くわし経験した71人もの人々自らが書き記したものである。今回71人の記録をとるために，プロジェクトチームを私のもとで編成をした。そして，巨大地震や大津波，原発事故の被害と私が所属する宮城県仙台市にある東北学院大学の学生たちの出身地とが重なっていることがある程度把握できた。所属大学は，宮城県を中心に福島や岩手など地元に密着した東北最大の私立大学である。震災前に東北各地に調査に赴くと，学院出身だという事でどこでも歓迎をしてもらえた経験が数多くあった。

この学院のネットワークを活用できれば，サンプル調査ではないが，ある程度被害の実態や全体像をつかめるということが３.11大震災の３・４日後には予想をたてることができた。そこでまずゼミ生に「震災レポート」と題して，早い段階で覚えている限りの記録文章にまとめてもらった。

メール送信の履歴を見直すと，３.11の一週間後の18日に３年生（４月から４年生）のゼミ生に向けて次のようなメールを流した。

「大学の校舎使用は不可という判断になりました。バイトも大学もないみなさんに宿題です（もちろん不可能な人は優先すべきことをしてください)。パソコンや携帯あるいはノートで次の作業をしてください。まず時間を震災直前に巻き戻し，震災当日から振り返って今まで何が起こったのか詳細にレポートしてください。情報がどのように発信されたり，受け取ったり，共有されたり，津波や原発，食糧をどのように感知して不安に思っているのか，非常に貴重な体験を現在進行形で経験しています。おそらく今までやってきた卒論のテーマはすべて不可能になりました。そこで私からの提案としては，みんなで震災関連で「一本の卒論」としてまとめてはどうかというものです。というか一つの作品に協同でやりたいかな？あわよくば本にして出版できたら理想です。」(2011. ３.18ゼミメール)

あるゼミ生は，津波の１時間前まで蒲生の干潟の卒論の調査に行っており，車で帰る途中に震災に遭遇し難を逃れた。しかし直前にインタビューしたおじいさんはお亡くなりになった。ほとんどの学生が卒論のテーマや調査地ごと消えてしまったのである。

３月18日にようやくバスなどの交通機関が一部復旧したのを待って２人のゼミ生を連れて蒲生に行った。私たちの想像をはるかに超える津波(跡)の光景が広大な範囲拡がっていた（写真２・３)。

しかし，ここで感じたことは，16年前の阪神・

写真２　仙台市蒲生地区（2011.3.18）

写真４　北上川と崩落した北上大橋（2011.3.18）

写真３　同上　破壊された護岸堤防

写真５　土台ごと引き剝がされたビル（2011.3.18）

淡路大震災も私自身経験するなかで，阪神高速道路やビルの倒壊，長田の火災現場など圧倒的に上から鳥瞰する視点で小さな声が掻き消されていくというものであった。なかにはヘリコプターで救助の声が遮られることが起こった。今回も記録をみてみると，やはり上空を通り過ぎるだけで一向に救助が来ない地域が多数あがってきた。

この経験がなければ本書を世に出そうとは思わなかったであろう。つまり，16年前に素朴に感じた疑問が，今目の前で繰り広げられていることで浮かび上がり，阪神淡路大震災の私に向けて返事を書く時がきたように思えたのである。

ようやくガソリンが手に入りはじめた３月27日に救援物資と慰問のため，ゼミ生たち数名と元ゼミ生のいる石巻（写真４）や女川（写真５），これまでの調査でお世話になっている旧北上町などを訪れ，改めて被害の大きさと深刻さを肌身で感じた。

現場で見聞きしたものでおおよそのイメージをつかんだ後，まずは手近な所でやっている実習や一般教養の講義ものを通じて，約500件を超える震災レポートを集めることができた。教養の講義ものは新一年（震災時は高校生）がほとんどだったので，被災時は国公立大の後期受験やそれ以外の人は自動車免許取得のために教習所に通っている人が多いことがわかった。

もちろんそれぞれ微妙に異なるがその違いは誤差の範囲であったので，取捨選択しながら，地域性と親御さんや知り合いの記述に注意を傾けた。そこで改めてその学生にコンタクトをとり親御さんや知り合いに震災の記録のご協力を仰いだ。

大まかなエリア別にゼミ生を中心としたプロジェクトチームを編成し，情報収集を行いトピックを出し，そのなかから書いて頂けそうな方を選

写真６　火災の気仙沼市鹿折地区（2011.4.14）

写真７　同上　刺激臭でマスクのゼミ学生

出した。さらに職業・階層・年齢的な偏りをできるだけ無くすために，学院のOB・OG会の各支部や離島や避難所に赴いて直接お願いすることを行った。

４月14日には気仙沼支部の齋藤欣也支部長や庄司幸男さんを慰問に訪れ，現地を案内してもらいながら現状を聞くことができた（写真６・７）。私が2005年学院に着任したばかりのころに，佐々木俊三先生を通じて，気仙沼で講演をするようにお願いされてからの付き合いで，その後発展実習などで２年ほど気仙沼と唐桑の調査のアシスタントやコーディネートしていただいた。

気仙沼の津波と火災現場を滅入るなかで絶望し，しばらく連絡も取ることも憚られたが，みなさん無事だった。実は今回のネットワーク型の調査を思いつけたのも，この気仙沼同窓会とのつながりと信頼関係があったことがその原型となっている。

現場では震災後から１ヶ月経つのに，ガソリンと津波の臭いと鼻を突きさす刺激臭で喉や肺が痛くなったのを覚えている。さらに１カ月経ってもまだ「無免許」状態で自動車が走っていた。免許の再発行ができない状態が続いていたからである。このときの訪問も，直前の４月７日の震度６強の余震によって延期になった直後のものである。

４．学生が参加する編集会議の発足

大学ではGW明けに授業がはじまり，学生を集めてのはじめての編集会議を2011年５月７日に開いた。その時の資料を紐解いてみる。

大震災記録出版（報告書）に向けて（5.7）

仮題「大震災の際にたつ―3.11東日本大震災のエスノグラフィー」
出版予定：2012年３月11日，新曜社
ページ数：500頁，50人程度の体験・記録
（１人10頁＜１頁1200字数×10＞）
出版編纂・編集チーム：金菱研究室
４年生：A（古川）・B・C（新港・蒲生・相馬）
３年生：D・E（古川・ラジオ）・F（七ヶ浜）
２年生:G（テレビ)･H（福島川俣町)･I（石巻）

スケジュール
５・６月　原稿の募集と収集
７月末　原稿を集める
８月初旬　出版社と打ち合わせ
８・９月　調査・補足インタビュー
10月　最終原稿の選定
12月　校正
１月　最終校正

ほぼこのスケジュール通りになった。当初のゼ

ミの体制から，被災地の拡がりと現地調査を踏まえて，地域別に２年生から４年生までの地域構想学科の学生で（プロジェクト）チームを再編成した。

５．同窓生のつながり

その拡がりから抜け落ちる地域については，気仙沼の講演の際にお世話になった学院同窓会の小原武久さん（閖上で息子さんを亡くされる・同本収録）に相談し，各支部を紹介してもらった。さっそく連絡をとり６月18日宮古支部・19日釜石支部（写真８）気仙支部大船渡・陸前高田（写真９），22日相馬支部をそれぞれ訪れ，現地を案内してもらいながら，原稿の依頼をおこなった。

その時はあまり考えていなかったことだが，いわば，地域の記録を，地域の人々自らの手で残すということを，大学と社会学のネットワークを活かして実践することは，教育的意義としてとても大きかった。チーム（メンバー）の一人である学生は，本人も津波に呑み込まれ，目の前で祖母を亡くしている。その学生は現場でこの津波が何をもたらしたのかを自分の目と耳でそして心で必死で感じようとしていた。

写真８　釜石支部訪問（2011.6.19）

写真９　気仙支部大船渡にて（2011.6.19）

６．御遺族への“非情な”お願い

一年以上経ってから記録を書いてもらうことは，比較的容易なことなのかもしれないが，私たちが執筆を依頼したのは，１ヶ月から半年程度のごくごく震災発生後から間もない時期であった。当時はいまだ震災から傷が癒えない時期であったし，何よりも家や仕事を無くされ避難している人々に対して，単なるインタビューだけでなく，その当事者に書いてもらうことは常識的にはあり得ないことであった。

しかし，私は心を鬼にして，非情なお願いをしなければならなかった。とりわけつらかったのが御家族を亡くされた御遺族の方々への依頼だった。それぞれの実情に合わせてお会いしたり，手紙やメールでお願いを試みた。過去のメールを紐解いてみると，大震災から３か月後に送ったメールが残されていたので，最小限削っただけの長文の本文を以下転記しようと思う。

2011年６月11日御遺族の方に送ったメール

○○ ○○さま

突然の訪問にも快く対応してくださりありがとうございました。さっそく御三方に連絡し，来週の土日に現地に赴くことになりました。

震災のとき私が医者ならばけが人や病人を救い出せることができたのにとか，少し悶々としており，私なりにできることはないかと考えていました。そこで私なりに出した結論が「大震災の経験」を記録として残すことだということが何となく見えてきました。半ば自分の「使命

感」として動いています。

テレビやYouTubeなどをみれば津波の映像が出ているし，新聞をめくれば震災の記事が載っています。そこには遺族や被災者のインタビューの声が載っています。しかしどれを読んだり見ても何か「軽い」感じがし，断片しか伝わってこず，現場でいったい何が起こっているのかさっぱりわかりません。インタビューではなく，震災の当事者の視線にたって，そこで経験したまま感じたままを無制限で書き綴ってもらおうと考えています。すでに東京の出版社と掛け合って本をだすことも合意しています。声なき声を記述するので，50人以上で500頁を超える分厚いものになろうかと思います。

昨日のお話を聞いていて，御子息を亡くされた気持が痛いほど伝わってきました。そしてなによりも御子息を愛されていた（愛しつづけている）胸の内をほんの少しだけ垣間見ることができました。おそらくこのように話してくださるのにも相当の月日がいったのではないかと思います。２万余命の命をご家族のみならずわたしたちはどのように今回の震災を受け止めたらよいのでしょうかという疑問がいつも頭をもたげます。あまりにも大きな犠牲を払いました。

ここからは私の勝手な暴走で，○○さんの気持ちに添えていなかったらご容赦して聞いてくだされば ありがたいです。

できれば，○○さん自身に震災・津波の記録を本に掲載してほしいという気持ちを強く持ちました。それは３点ほどあります。

①　命日への追悼の意味合い

行方不明者捜しから遺体安置所巡りへと変わり，今日もいなくてホッとした気持ちの連続だったけども，日がたつにつれて早く見つけてやりたいという気持ちの変化，手帳につけた「？」の意味。毎日お風呂でがれきの下で寒かっただろうと息子さんのことを思い続けている，そのお気持ち・行動を書いてもらうことで（むしろ息子さんに語りかけることに近いかもしれません，あるいは息子さんと一緒に書くことになるかもしれません），何か生きていた証を形（たとえば今回お願いの本に書きつづる）にして来年の命日に一緒にささげることができればなあと願っています。出版日を３月11日に設定しているのも，当初から強く思っていた日にちです。

②　遺族の気持ちに寄り添う

２万余命の命の背景にはそれをはるかに上回る遺族がいるわけですが，いまだ深い深い悲しみに苛まれています。昨日話した卒業生もどん底に突き落とされたままです。本当は遺族の気持ち悲哀は一緒なんだけれども，その部分は報道もされないし，タブーにされ当事者同士も「バラバラ」な状態で，それをつなぐ回路を失っているように思われます。

簡単なインタビューではなく，当事者自らが書くことでそこに少しでも遺族と遺族の気持ちを繋げられるのではないかと考えています。もがき苦しみながらもそこから這い上がることは第三者では説得力はありません。単にCMのように頑張れではなく，○○さんが私に語ってくれた「３ヶ月後一歩前に進む，１年後はまたもう少し進む」，「2011年として何かしなければならない」という噛みしめる言葉が遺族の気持ちに心強く響く気がしてなりません。

○○さんの文章でほんとうに一人でもいいので遺族の心の部分を救い出すことができたら私はうれしいです。

③　津波の教訓（二度とこのようなことが起こらないという意味も込めて）「たられば」でいえば，いくつも救えた命があったはずです。本人が不本意な形で人生に幕を閉じざるをえないだけでなく，やはりこれだけ遺族に深い悲しみを残すということを広く世の中に知ってもら

うことで，一人でも多くの人にこのような津波の経験を二度としない，遺族にならないということが副次的な形でも頭の片隅にでも入って伝えることができるかなと思っています。

本に残すことは，他人が自分の気持ちに土足で踏み込むデメリットはありますが，以上３つぐらいのことを本でつくりだすことはできるかなと個人的には勝手に思っています。今回思い切って〇〇さんに無理を承知でお願いしています。

初対面だとこのようなお願いはしないのですが，何か「自然」とお願いしたい，書いてほしい気持ちになっています。なぜかはわかりません。阪神・淡路大震災と東日本大震災を身近で経験し，ひょんなことから〇〇さんに出くわし，知人を共通に知っていたことなど，不思議な縁やつながりが背中を押してくれるのかもしれません。なんとかこの縁やつながりを確かなものにしたいという思いもあります。

８月ぐらいにいったん原稿を集めようと思っていますので，もう少し時間をおいてから返事をいただいても全然構いません。少し頭の片隅にもおいていただけると幸いです。ただ懸念しているのは，時系列に書いていただくために，そのことは思い出したくないということも当然あります。その場合は，今回のお願いは放念してくださって一向に構いませんので，上記では勝手なことを代弁しましたが，〇〇さんの気持ちに即して斟酌していただき御判断いただければと思っています。

一応添付にみなさんにお渡ししている依頼書と目次のイメージ，レポートのサンプルを置いておきますので，参考にしていただければ幸甚です。

長文・駄文ご容赦ください。

金菱　清

以上

御遺族の手記でなければ，津波のほんとうの正体はわからないと思っていた。私達はこの手記を通して真剣に向き合うことができた。頼んだどの方からも賛同を得られた。出てきた手記を見て，何度も涙が出てそれ以上読み進めることができないほどの切迫感があった。辛いけども，避けては通ることのできない現実がそこにはあった。

たとえば，ある原稿には，変わり果てた我が家やご家族を失った悲しさ，仮土葬するしか手段がないという悔しさなどが詰まっていた。土葬は当初簡単に書かれていた。御遺体を火葬に付すことができずやむなく土葬することは知っていたが，それ以上のことはわからなかった。そこで無理を承知で加筆をお願いしたところ，引き受けてもらうことができた。しかし後で，土葬は当初書くことができなかったことがわかった。納得のいかない弔いのありかたに対してやるせない気持ちがいっぱいだったのである。

しかし，この土葬のことを記してもらうだけで，文章自体に受ける印象ががらりと変わった。手続きのことがわかるだけでなく，その時の御遺族の心情までもがくっきりと映し出されたのである。

と同時に，ご自身は見てもいない津波に大切な家族を奪われ，津波の正体は何なのかと問う胸の内の苦しみを知った時，この記録を残すことは人の心に土足で踏み込むことになってはいないだろうかと，自問自答することがしばしばあった。

７．試みとしてのネットワーク型調査の結果と影響

最後に手探りながらネットワーク調査の試みとして行ってきた結果とその影響について記しておきたい。

まず教育効果についてである。各地を回り何十回とインタビューを続けていると，ある時福島大学の先生と一緒に聞き取りにいったあと，学生がちゃんと名刺を渡し，メモを一生懸命とっている

ことに驚かれていた。私自身気付かなかったが，何も教えることなくいつのまにか社会学教育・調査実習となっていて調査方法が自然と身についていたことになる（ひとりは大学院に進むことになった）。思わぬ副産物となった。

また，遠隔地の手の届かない場所は，知り合いのネットワーク（岩手県立大学の阿部晃士さん・福島大学の加藤眞義さん・茨城大学の原口弥生さん・いわき明星大学の鎌田真理子さん）を通じて補った。このように不十分ながら工夫することで，震災までどうであったのかという現場の地域史を描くことに多少なりとも成功したように思える。

そしてお願いする際には，選び出したときのトピックを中心に書いてもらうことにしたが，特段の制約や文字数の制限などは設けなかった。それはその人自身の目線で震災やその地域のことについて自由闊達に描いてほしかったので，５Ｗ１Ｈ（いつ・どこで・誰が・何を・どのように・なぜ・おこなったのか）という経験を中心に書いていただいた。もちろん過不足などはどうしても生じてしまうので，学生の場合には何回もこちらとやり取りをし，またそれ以外の方はやはりご家族を亡くし，家や仕事を無くした人々にとってこれが限界だろうと１・２回の往復のなかで読者にできるだけわかりやすく伝わるように最低限の補足だけはおこなった。

大震災の全体像がわからず，走り（探索し）ながらプロジェクトの修正を行っていくために，当初は雲をつかむような心許なさが正直あった。プロジェクトチームで編集会議を開く際にはできるだけ進捗状況と全体像をメンバーごとで報告しあい，空白地帯や不足するトピックを洗い出しながらそれを埋めていく作業をし，震災全体にムラができないように努めた。

しかし，実際できあがってみると，まだまだ追い切れていない情報があることに気づかされた。ネットワークの網にひっかかってこないことと，たとえ捉えたとしても当然のことながら断られるケースも数限りなくあったし，そもそもこのネットワークの網自体が一大学規模のネットワークを超えるものが必要であったのかもしれない。被害の大きさがそれだけ深刻であったからである。それは今後の課題である。

本の刊行後，さまざまなメディアから取材を受けたり，書評などを掲載していただいた（写真）。

そして，お礼巡りのために，岩手・宮城・福島の各執筆者を訪れ，お話を伺うことができた（写真）。これを出してくれてよかったと逆に私に対してお礼の言葉をいただいた。とりわけ御遺族の方の反応に緊張した気持ちで臨んだが，御霊前に本書を飾ってくださっている方や，本書の中に生きているようでとおっしゃってくださったり，宝ですといって本を抱きしめてくださる方もいて，この一年苦しい作業であったが，刊行できて執筆者の方々に愛された本ということが何よりも私にとっては嬉しかった出来事であった。

日本民衆史に残る体験

3・11慟哭の記録　金菱清編

写真10　歴史家色川大吉氏による書評
「日本民衆史に残る価値」共同通信

リレー読書日記

佐野眞一

感動で思わず涙が流れる自慰の場面

今回の3冊

CSR Solution

03-6229-5114

日本財団

写真11　作家佐野眞一氏による書評
「飛びぬけて優れた記録」週刊現代

痛切 被災者の声 東北学院大生が証言集を出版

3.11 大震災 ―特集―

編集を呼び掛けた金菱准教授(左)とプロジェクトに参加した学生＝仙台市泉区の東北学院大泉キャンパス

東北学院大の学生有志が、東日本大震災の被災者71人に体験をつづってもらい、「3. 11慟哭(どうこく)の記録」(新曜社)にまとめた。岩手、宮城、福島の3県の被災者が、震災当日の状況やその後の暮らしを自らの言葉で記している。広範な地域から震災の実相を描く証言集となった。

本の出版を思い立ったのは同大教養学部地域構想学科の金菱清准教授(36)＝環境社会学＝。

震災直後、学生に体験リポートを書かせたところ、さまざまな証言が集まった。「幅広い地域と世代から貴重な体験談を集めよう」。学生に呼び掛け、「震災記録プロジェクト」が昨年4月中旬、スタートした。

学生10人が被災地を訪れ、被災者に直接、体験談の執筆を依頼して回った。地域構想学科を今春卒業した大内千春さん(22)は「原稿依頼は難しい作業だったが、熱意を伝えて書いてもらった」と言う。

沿岸部で津波に巻き込まれた人、ノリの養殖再開を目指す漁業者、石巻市大川小で娘を失った保護者、原発事故で警戒区域の自宅に一時帰宅した学生…。さまざまな地域から、生々しい震災の様子や痛切な思いを伝える原稿が寄せられた。

被災者自身の言葉が持つリアリティーを生かすため、巻頭の地図以外の写真やイラストは載せなかった。字数制限は設けず、学生が最低限の補足と訂正をしただけで、原文をそのまま掲載した。

メンバーの地域構想学科2年の渡辺英莉さん(19)は宮城県七ケ浜町の自宅で被災し、目の前で祖母を亡くす体験を寄稿した。「『助けられなかった』と自分を責める気持ちがあったが、皆さんの力強い文章に励まされ、気持ちの整理がついた」と打ち明ける。

金菱准教授は「小さな物語を生々しい文章で濃密に描き、広範な地域で取り上げることで、震災が深く、広く理解できる」と話している。四六判560ページ。2940円(税込み)。

2012年04月08日日曜日

写真12　河北新報20120408
「痛切被災者の声 東北学院大生が証言集を出版」

写真13　齋藤欣也気仙沼支部長(右)と庄司幸男さん(左)

写真14　菊池真智子さん夫婦（釜石）

写真15　菊地萬右衛門さん（亘理町荒浜）

写真16　三浦清一・マリさん夫妻（唐桑）

写真17　佐藤清吾さん（石巻市北上町十三浜）

写真18　斉藤次男さん夫婦（飯舘村）